

〔卒都婆小町型付〕

△卒都婆小町 位序之破

一 脇二人僧出立、小袖 白衣。常のごとく、水衣の上に腰帶。しやもんぼうし。本脇は、扇右に持、左りに珠数持。つれ僧は、扇腰前にさし、珠数ハ右に持つ。一切之つれ僧如_レ此。

一 太夫、面老女。覆鬘の上にうば髪。かづら帯、古きくすみたる、可_レ然。小袖も同意たるべし。ぬぎかけ。こし帯。水衣。扇前にさし、ぬり笠着て、ほそき杖をつく。

此脇出る事。笛、ひしぎ、跡ハ次第のねとり吹。鞞ハ、草之位に打て、二段打切て、三段目に出頭を打也。出頭のやうすハ定家にあり。扱、出て、舞臺常之所にて立向ひ合、常のごとく次第をうたふ。扱、謡は別之事無_レ之間、書略_ス。常のごとく、地をとる時に正面向、名乗。道行過て、●「実捨る身の習なれ」と、半着に着て、又正面向、●「急候程に、是ハはやあべ野の原とかや申候、暫此あたりにやすまふずるにて候」と云て、常の脇ノ座所になをる。

一 太夫又次第にて出る。笛ひしぎ、跡次第之高音。但、習之ゆり有。鞞に猶以習あり。先、真之五段之次第を打て、太夫も常のごとく出頭聞て幕上させ、奥よりほのくと静に出て、

橋が、り一間計にても、亦橋が、り中ほどまで成共出て、正面向立留る。是を見て、鞍打切て、やすミ頭をうつ。爰までの大小鞍の習にハ、次第にあらざ一聲にあらざ、只不_レ乗やうに打事也。扱、太夫の立やすミ様、〰鸚鵡小町にあり。扱、太夫又舞臺の方へあゆむ。此時より〰本の次第にうつ物也。扱次第常ノごとく、大鞍の方へつく時に、大小之鞍の掛聲、秘事の習あり。先常の次第のごとく打切て、跡の打すへる所の掛聲を、△はつおんいやあいやあと越_(掛)聲掛る。此時うたふ事也。

常のごとく大鞍の方へ向

身ハ浮草をさそふ水、く、なきこそ悲しかりけれ、身は萍を誘ふ水、なきこそかなしかりけれ

さしこそ同

哀やげに古へは、驕慢尤はなはだしう、翡翠のかんざしハあだとたをやかにして、楊柳の

春の風になびくがごとし、又鶯舌のさへづりハ、露をふくめる糸萩の、かごとばかり咲初る、花よりも猶めづらしや、今ハ民間賤のめにさへきたなまれ、諸人に恥をさらし、嬉しからぬ月日身に積つて、百年の婆と成てさふらふ、都ハ人目つ、ましや、もしもそれとか夕間暮、月もろ共に

静に少出る

出てゆく、く、雲井百敷や、大内山の山守も、かゝる憂身ハよもとがめじ、木隠れてよしなや、

引見る、但右之方よし

鳥羽の戀塚あきの山、月の桂の川瀬舟、

つえを両の手にて前へつき、留め見る也

こぎゆく人は誰哉らん、く、か様にさす

〰又笠をぬぎ、左手に、
持て則うたふ□□也

らひありき候程に、是ハ津國あべ野の松原とかや申候、餘にくるしう候程に、是なる朽木に腰を腰をかけべき方をそと見やりかけて、暫く休まばやとおもひ候と云て真中常の所より少先へ出て、床、脇二人ながら立也、なふく、是成乞丐人御覽候へ、あらあ

さましとやつればはて、候、や、腰を掛たるハ卒都婆にてハ候ハぬか、教化してのけばやと思ひ候

爰にてつれ僧は太夫のうしろを脇廻り、太夫の右の前へ行向也 脇いかに是成乞丐人、おことの腰掛たるハ忝も佛躰色性のそとばにてハなき

か、爰にて太夫右へねぢかへり 床机を見る也そこ立のきて余の所に休ミ候へ 太夫佛躰色性の忝きとハ宣へ共、爰にて床机など見るハ悪し。古へより嫌来也是程文字も見えず、割る

形もなし、脇唯朽木とこそ見えたれ 脇縦深山の朽木成共、花咲し木ハかくれなし、況佛躰に刻め

る木、など其しるしなかるべき 太夫我も賤しき埋木なれ共、心の花のまだあれば、手向になど

かならざらん、脇扱佛躰たるべき謂はいかに つれ僧夫卒都婆ハ金剛薩唾、かりに出化して三摩耶形

を行ひ給ふ 太夫行ひなせる形ハいかに 脇地水火風空 太夫五躰五輪ハ人の躰、脇何しに隔の有べき

ぞ つれ僧形ハそれにたがはず共、心功德ハ替るべし 太夫扱卒都婆の功德ハいかに 脇一見卒都婆

永離三悪道 太夫一念發起菩提心、脇是もいかでかをとるべき つれ僧菩提心あらばなど浮世をば厭は

ぬぞ 太夫姿が世をも厭ハゞこそ、心こそいとへ 脇心なき身なればこそ、佛躰をばしらざるらめ

太夫佛躰としればこそ卒都婆にハ近付たれ つれさらばなど礼をばなさでしきたるぞ 太夫とてもふ

したる此そとば、つれ我も休むハくるしひか 脇それは順縁にはづれたり 太夫逆縁なりとうかぶべし

つれ提婆が悪も 太夫観音の慈悲 脇繫持が愚痴も 太夫文珠の智恵 つれ悪と云も 太夫善也 脇煩惱と

云も 太夫菩提也 つれ菩提もと 太夫樹にあらず 脇明鏡又 太夫臺になし 太夫実本

来一物なき時ハ、右の杖にて舞臺下右の前を一つつく佛も衆生も隔てなし、△正面向、爰より位とりしづめるもとより愚痴の凡夫を、く、救はん為の方便の、深き

脇を見

誓の願なれば、逆縁成とうかぶべしと、脇を見懇に申せば、正面向まことに悟る非人也とて、二人の僧ともにつくばひて礼僧はかうべを地

をなす。又頭を上げて礼する也に付て、三度礼し給へば、太夫我ハ其時力を得、なをたはむれの哥をよむ、極楽の、内ならばこ

そあしからめ、そとは何かはくるしかるべき、脇を見て六借の僧の教化哉、立てして柱の本へ行、へたと又とゞするむつかしの僧の教化や

太夫立てのくを見て、脇も二人ともに立て、もとの常の脇座になをる。又先二人共に立て、脇、

つれ僧に向ひ、「是ハ心ある乞丐人にて候、古の名を尋ばやと思ひ候」と云て、扱本座になをり、

又うたひ出すも吉。

脇是ハ心ある乞丐人にて候、古の名を尋ばやと思ひ候、いかに乞丐人、古はいか成者ぞ、名を名

乗たらばなき跡を吊候べし、太夫跡をとふて給り候ハ、恥かしながら古の名を名乗て聞せ申候べ

し、△爰をなげきと号して、鞍ハうたぬ物也是ハ出羽の郡司小野の良實が息女、小野の小町がなれる果にてさふらふ也、脇語 鞍ハ爰より打也。あひ痛ハしやな

しらひ迄也小町ハ、さも古ハ遊女にて、花の形か、やき、桂のまゆずミあをふして、白粉をたえさず、地羅

綾の衣おほふして、桂殿の間にあまりしぞかし、太夫されば容色をこと、し、地遠きハ忍ぶ思ひを

なし、近きはうれへの心をつくす、太夫されば碧浪のすいびんをた、ミ、地彩雲の翠嶺に廻れるが

ごとし、太夫暁と、のへる有さまハ、地芙蓉の暁の、波に浮べるにことならず、太夫哥をよミ詩を

つくり、地酔をす、むる盃ハ、太夫寒月袖に静なり、地か程優成有様の、いつ其程に引かへて、か

うべにハ霜蓬をいたゞき、嬋娟たりし両鬢も、はだへにかしけてすミみだれ、宛轉たる双娥も、

遠山の色をうしなふ 太夫 百年に 地 一とせたらぬつくも髪、かゝる思ひは有明の、左りに持たる笠を少上へ影恥かしき姿

かな 顔をかくす理をする也 頸に掛たる袋にハ、いか成物をいれたるぞ 太夫 けふも命ハしらねども、あすの飢をたすけ

んと、栗豆の餉を、袋に入れて持たるよ 地 うしろにをへる袋にハ 太夫 垢膩のあかづける衣あり

地 臂に掛たる筐にハ 太夫 白黒の烏芋あり 地 破蓑 太夫 破笠 地 面ばかりもかくさねば 太夫 まして霜

雪雨露、涙をだにもおさふべき、左り 袂も袖もあらばこそ 地 今ハ路頭にさすらひ、爰よりつえつき立て 往来の人に物を

こふ、左りの笠をうけて物を乞鉢をする 乞得ぬ時ハ悪心、又狂乱の心付て、さつくと左足右足と引て立すがりといきつく仕形あり 聲かハリけしからず 太夫 なふ物たべなふ、く

お僧なふ 杖にて下をつき 何事ぞ 太夫 お僧なふ、脇 小町がもとへかよハふによ 脇 おことこそ小町よ、何とて

うつ、なき事をば宣ふぞ 太夫 いや小町といふ人は、餘りに色がふかふて、あなたの玉章こなた

の文、かき暮てふる五月雨の、虚言成とも一度の返事もなふて、左手してなく 今百年になるが報て、あら人戀

しや、あら人戀しや 脇 扱唯今ハいか様成人の立寄たるぞ 太夫 小町に心を掛し人はおほひよなふ、

脇を見る 中にも思ひ深草の四位の少将の、あし拍子にて乗込 恨の数の廻り来て、引てつえつきすへ正面を見やる 車の榻にかよハん、方がくハ不レ入、右へ見上たるがよし 日ハなん時ぞ夕暮、

左りへまはり 月こそ友よ通ひぢの、引正面見 関守ハあり共、爰より居座へ入、物ぎあり とまるまじや出立む

一々物ぎの笛に習あり。大小鞆も、常の物ぎは不_レ乗あひしらふ事也。此々卒都婆小町ハ乗てはやす物也。

か様の大事を知藝者まれ也。

一々太夫出立ハ、先々笠も杖も捨て、_レかり衣もぬぎ、小袖ハ初より_レぬぎかけなれば、其上へ_レ長

絹きて、^二金のかざおりを着し、右に^一扇持、出る。

地より又如^一此うたハせて、其内^二太夫居座より出るがよし。序所に行

太夫 左手にて左りの前をそととり上ル

△爰^二かけりあり。

一^一かけりの事、常のごとく左りへ大廻り、すみ取、廻りて、又右へうち出し、正面へ出て、すみ取、

右へ廻、少乗などして左りへきりくと二つ廻り、則うたひ出す也。此謡出しに習あり。大小鞆打上て、其打上さまの小鞆の間よりうたふ事也。●やあゑい やつ ^一ぽぽ いやつ ^二とうつ。其^一ぽぽの

二つのおつにつれて「浄衣の袴」とうたふ事にて候。

地^一とると、あし拍子ふむ

浄衣の袴かいとつて、

立烏帽子に風折、

狩衣の袖を打かづひて、

人目忍ぶのかよひぢ、月にも

見上 則右へまはる也。^一返したる袖ハおろし

ゆく闇にもゆく、雨の夜も風の夜も、木の葉の時雨雪ふかし

軒の玉水とくくと、^一行てハ

又扇の中を見る

帰り、かへりてはゆき、

一夜二夜三夜よ、

七夜八夜九よ、とよの明りの節會にも、

あハでぞか

よふ鶏の、時をもちかへず暁の、

榻のはし書、百夜までと通ひきて、

九十九夜に成たり

あら

くるし目まひや

胸くるしやとかなしびて、

一夜をまたで死したりし、深草の少将の其怨念が

付添て、か様に物にハくるハするぞや、

是に付ても後の世を、

願ふぞまこと成ける、

砂を

塔ど重ねて、

黄金のはだえこまやかに、

花を佛に手向つ、

悟りの道にいらふよ、

一^一此能ハ、文句よろづ文言のごとく思惟して、^一はやし物^二謡も同。^一太夫も仕舞事にて侍れども、

^一関寺や^二鸚鵡など、ハ又心かハる事にて候へば、右二番より位かるく侍る也。

右之趣末代家之為_レ鑑、先祖善竹於_レ是書記。雖_レ致_二一子相傳_一年來御執心不_レ淺所依_レ難_二默止_一秘密不_レ殘令_二傳受_一候。聊不_レ可_レ有_二他見_一者也。

今春太夫竹田七郎

年号月日

秦氏勝判

今春太夫自筆自判之書以令_二書写_一進_レ之候。此外之事有_レ尔_レ世者可_レ為_二僻事_一者也。

寛文五_乙曆

卯月吉日

秋扇翁

照三(朱印影模写)(花押)

松井与兵衛殿_参